

第2部 パネルディスカッション

地域公共人材とは —起業で社会・地域をつなぐ試みの中で—

コーディネーター

田村 太郎 (NPO 法人 edge 代表理事)

パネリスト

谷口 知子 (有限会社キュアリンクケア代表)

山中 文 (NPO 法人み・らいず事務局長)

谷口知子 (たにぐち ともしこ)

看護師・認知症ケア専門士・NPO 子育てアドバイザー養成講師。京都市立看護短期大学卒業。立命館大学大学院応用人間科学研究科修了。看護短大を卒業後、私立・公立病院の看護師として勤務。勤務のかたわら周囲の妊産婦が笑っていないことに疑問をもち、働きながら大学・大学院において家族機能、社会臨床を学ぶ。

妊産期において、妊産婦当事者だけでなく男性・夫婦・家族等の多様な視点からケアが必要と感じ、2005 年に有限会社キュアリンクケアを設立。2008 年妊産期から訪問をおこなう妊産期一貫支援を構築。2009 年経済産業省ソーシャルビジネス 55 選・「CB・CSO アワードおおさか」奨励賞受賞。

山中 文 (やまなか あや)

大学の友人に誘われたことがきっかけで障がいのある人と関わる。その後、知的障がいのある人の余暇支援をおこなう学生サークル「さあ！来る家(け)」を立ち上げ、活動に没頭する日々を送る。2001 年、サークルの仲間と共に特定非営利活動法人み・らいずを設立し、障がいのある人の地域生活支援に携わる。2005 年、障がいのある人のアート活動事業「のーまらいず」で「社会起業家のためのビジネスプランコンペ“edge2005” 優秀賞受賞。現在は高齢者事業の責任者として、様々な課題をもつ人の地域生活を支える仕組みづくりのため日々奮闘中。

起業しようとは思ってなかったけれど

司会 それではパネルディスカッションに移りたいと思います。パネリストは有限会社キュアリンクケアの谷口知子さんと NPO 法人み・らいずの山中文さん。コーディネーターは引き続き田村太郎さんをお願いします。それではよろしく願いいたします。

田村 第Ⅱ部は具体的な事例を詳しく皆で共有して、その後、地域公共人材というところに焦点をあててディスカッションを進めていきたいと思っています。最初にお二人から、

それぞれのご活動について報告をいただきたいと思います。

それでは、まず谷口さんにお話をいただいて、その後、NPO 法人み・らいずの山中さんからお話をさせていただきます。

谷口 有限会社キュアリングケア代表の谷口と申します。今日は、好きなことをしゃべってください、起業のきっかけ、事業の内容、実践した感想を押さえてくださいとのことでしたので、この3つを中心にまとめてみました。私のやっている事業は大きく分けて3つあります。2年前、テレビに取材された映

像をもってきましたのでご覧ください。
(DVD)

ある局の京都放送局で取材していただきまして、丸2日間撮っていただいて、5分くらい特集が流れました。反響は大きかったらしく、大阪放送局でも放送されるということでした。

もともとテレビ局の記者が、弊社のサービスの一つである写真集を見て、これはすごいから取り上げましょうと取材が決まったわけですが、編集では、訪問相談ではなく、メールでのやりとりだけで彼女が救われたような感じになっていたのですね。でも、それは違う。私は人と人との対面がないと本当の支援にはならない。出向かなければ、行き届かないというのが私の信条で、その表現について、「訪問相談ありきの“メール”で」というような感じに変えてもらえませんか？と言うと編集の方に「そんなことはできない」と言われて「じゃ、結構です」と。若いですね（笑）。取材してくれた記者はずっと「もったいない、もったいない」と言い続けておられました。彼には悪いことをしました。

今日は「起業で社会・地域をつなぐ―地域公共人材のネクストステージ」ということですが、私がこの場に立っていていいのかなと思うのです。起業しようと思って看護師になったわけではなく、なぜ会社をつくることになったのか、実は自分でもよくわかっていない。こんな私でも会社はつくれるし、こんな活動ができるという例の一つとして、ここに私がいるということを知ってもらえたらいいのかな、と思います。

私が思っているのは、心って、体と密接に連動している、どちらかをとりあげて解決するものではないよね、ということです。そう

思って事業をしています。

私は一生使える手に職だと思って看護師になったのですが、なってから手に職ではなかったと気づきます。当時、介護保険はありませんでした。看護師は手に職といわれながら病院がないと生きていけなかった。当時看護師の独立開業という道はなかったのです。

産後うつと友の死

起業のきっかけとして、2つのエピソードをお話します。1つめのエピソードは、産後うつです。現在、病院で出産して入院できる日数の最短は、3泊4日です。退院後は産後一カ月健診までほとんど支援がありません。“こんにちは赤ちゃん事業”（乳児家庭全戸訪問事業）で産後訪問がありますが、産後1か月以内に訪問できる自治体は多くはありません。

やっと最近、「産後うつ」という言葉が聞かれるようになりました。人生にはいろんな危機があります。介護も一つの危機でしょう。でも妊娠、出産、産後も危機だということは、なかなか日本で言われていなかった。ところが、韓国では10年前から言われていました。中国でもウェブサイトには「新米ママ、産後うつをなめてはいけないよ」と書かれています。日本は女性のアナウンサーが産後うつになって自殺したということで、少し認知されました。人が死なないと認知されないこの国は、その時点で中国にも韓国にも負けているような気がします。

いま提示しているのは男性側からみた産後うつのマンガです。これはある漫画家が、ご自分の奥さんか妊娠・出産した時、自分もいるのに、本当にいろんなことが変化した。それを目の当たりにしてマンガという形で

届けようと描かれたものです。これを見てホラーだとおっしゃる方もおられるのですが、これが現実です。

こういう現実が、実は見て見ぬふりをされたり、なかったことにされていたりという現実があるということを知っていただきたいと思います。

いまパワーポイントで提示している画面には、真ん中に表があって、折れ線グラフが上にいたり、下にいたりしています。これは奥さんが妊娠から産後期において、旦那さんがどのような心理状態の変化をとるかという表です。1986年に外国で発表されていて、一言でいうと、妻だけでなくダンナも心理的に不安定になっています、ということです。ところが日本では、このようなデータはあまり知られていない。出産はうれしい。けれど、産後3カ月までは憂鬱。妻のテンションが落ちている、ダンナも落ちている、両方落ちている。では、誰が助けるのか。この危機が言われていない。

あるテレビ番組で産後うつのドキュメンタリーがありました。最初、奥さんが産後うつになりました。優しいダンナさんが何とか支援をしようと思ったけれども、二人揃ってうつになってしまい、それまで男性は定職についておられたのに、働けなくなり、生活保護世帯です。もったいないです。生涯賃金2億円といわれている男性が、アッという間に税金を払う身ではなく、受ける身になった。

これって社会生産的に見ても非常にもったいない話です。なんとかすれば納税者を納税者として維持することができるのに、ここを見落とすのは非常にもったいない話だろうと個人的に思います。

2つめのエピソードは、友人の死です。私は35歳の時に、病院勤務時代の助産師の友

人を末期ガンで亡くしました。「あなたにとりあげてほしい」とお母さん方に言われるくらい素晴らしい助産師でした。また、もう一人同期がいるのですが、この人も夜勤にいてそのまま倒れて亡くなりました。すでに私の同期2人は、この世におりません。看護の世界はどうにかしないといけないと、ずっと言われていますが、ほとんど何も手つかずだと思います。女性も、男性も、そして支援者も、疲弊している状況なんです。

さて、現在35歳以上の初産婦が増えています。35歳以上の方が産後うつにかかる確率は、若いお母さんの2倍以上というデータが海外で出ているんです。だから、日本もこれから増えていく可能性は高いと思います。

また、悲しみのケアというのも現在抜けている。たとえば流産、死産しましたというとき、病院でのケアがきちんとできますか。なかなかできません。その後、自主グループ等で何とか気持ちを保っている人が多いけれど、この方たちのケアはまだ不十分です。

また、虐待の問題も「ああ、生活保護世帯なのね、産婦人科を受診していない人なのね」と思われているんです。虐待が原因で亡くなる赤ちゃんの月齢って、1カ月未満が多いのですが、いかにもわかりやすいステレオタイプの方が、虐待の結果お子さんをあやめてしまうケースは5割強です。半分弱は、それ以外です。つまり、社会的にはノーマークの家庭の両親がお子さんを手にかけている。

ある地域で実のお父さんが、生後5カ月でわが子を手にかけて逮捕された。奥さんは全く気づかなかったそうです。お父さんがお子さんを虐待したのは、生後1か月からだったということがあとでわかりました。虐待理由は、家庭のストレスと仕事のストレスでした。家庭のストレスは何だったかというのと、

タバコをやめたことだったそうです。そんな些細なことでもストレスになるくらい、産後の時期は追い詰められる時期なんです。非常にリスクが高い時期だということを、まだまだ理解されていないということが問題なんです。

親を支えるという視点

「命の始まりを支えるケア」、これが強く強く言いたいことです。これを言おうと思っても、病院にいては通用しないと思った。健康群、ここは放っておいても大丈夫だから、病院や行政などは要支援家庭、つまり、わかりやすい虐待群とか虐待予備群、そういうところを支援しないといけなくなっている。しかし私は、小さなストレス、タバコをやめて虐待したということもそうですが、小さなことが積み重なるだけで、アッという間に両親が、要支援家庭⇒虐待予備軍⇒虐待家庭へと移行すると思っています。

現在の支援は、多くが要支援家庭は支援しないといけなくなるとか、子どもの命を守らないといけなくなるといふ視点でつくられています。親を支えましょうね、という視点ではない。行政にはそういうサポートはまだ少ないと思います。妊娠中から、虐待予防ではなく、親支援の視点でサポートをする。タイミングを逃さず行えば、不安をこまめに解消していくことができるんですね。そして、健康群を健康群のまま維持できるんじゃないか。つまり納税者を納税者のまま維持することができるのではないかと考えています。

病院にいて何もできない。でも、「できる、できない」ではなく、「やるか、やらないか」だけだろう。では、病院を辞めて出しましょう。私は公立病院に勤めていましたから公務

員だったんですね。公務員を辞めて出ちゃいました。

一つ面白いエピソードがあります。辞める時に、勤務先の女性陣は全員「羨ましい」と言いました。ところが男性陣はたった一人を除いて「もったいない」と。たった一人だけ、男性で「羨ましい」といったのは、医者になりたくなかったのに、親が医者だったからならざるをえなかった若い医者でした。「君が羨ましい」と。

私は、死ぬまで看護師でありたいと思っています。今でも一看護師でしかないと思っています。ただ行動した結果が「起業」だった、それだけのことです。

ニッチな要求を満たす

テレビで紹介してもらったように、妊娠中から訪問事業をしています。なんで妊娠中からなのかというと、産後すぐに産後うつになるから、先に信頼関係を構築しておかないと支援が間に合わないんです。自分が泣いているところに、知らない人を家に入れますか。入れませんよね。妊娠中からずっと通い続ける。私の経験によると、産後の最大の山場が、産後2週間です。そこで拾えるか、拾えないかなので、妊娠中からかかわってないと無理です。支援は出向いてなんぼ。援助者の使命は何か。ある大学の先生は「相手を納税者にすること」だそうです。だから、私は「納税者を納税者として維持することが使命だ」と考えています。

他には、現場だけ回っていても仕方がないだろうと、企業内にアプローチして研修プロジェクト事業として実施しています。体で感じて、何が伝わって、伝わっていないか。奥さんがしんどそうだということが、よくわから

ない。「じゃ、ゲーム風にやりませんか？」とやったりもしています。

ほかに、こちらはセミナーのチラシですが、一昨年からやり始めました。私は看護職という現場にいて、非常に忸怩たる思いをしていたのは「自分たちの望む研修がない」ということです。病院側が企画するものは、偉い先生がやりますから、概論とか固い知識のようなお話になるんです。

看護学は「実践の科学」といわれています。看護師をしながら、私は大学の産業社会学部に入りましたが、そこで知ったのは、社会学は「越境の知」といわれているのだそうです。私、これを知って非常に感動しまして、両者をミックスしたセミナーをやったら、とても面白い。このセミナーを誰もやってくれないから、やっちゃったんですね。

これは大々的にやりたかったので“きょうと元気な地域づくり応援ファンド”に応募しました。「事業性のある事業ですから、ぜひ助成を出してください」といきました。審査は通ったんですが、最後に「これに人が来るのか」と言われた。なぜかという、ある男性は「研修ってタダで、いやいや行くもんじゃないの。お金を出して来るのか」。そこで事業性がないと判断されかけたんですが、私は、「絶対、来る」と言い切ったんです。私は、自分が知りたい研修だったら名古屋とか東京に行くんです。始めたら案の定、来ました。京都府だけではなく、兵庫、大阪、奈良、岐阜、滋賀。去年1回目で来ました。先月、2回目が終わったんですが、今年は、東は静岡、西は山口からお越しになりました。

やってみて、初めて結果が出る。現場を知っていて、ニッチな要求を満たすことが事業につながるというのは本当だと思います。実践した感想ですが、最初、起業した時に看護

師の大先輩から「10年かかる。お前、10年頑張れるか。」と言われました。ニーズはあっても市場として全くなかったものだからです。いやいや、3年くらいで何とかなると思いましたが、今、5年ですからやっぱり10年かかりそうですね。甘かったです。やはり人生の大先輩のおっしゃることは、正しいようです（笑）。

課題が解決するか

自分が思うことを語る場所がほしかったから、いろんな場所に行きました。いろんな場所に行きましたが、どうしてもNPOと競合する場所に出ることになるんですね。その時に、聞き飽きるくらい言われた質問があります。

ある大学の教授からも対談時にその質問をされました。「なぜNPO法人ではないのですか？」と。これはずっと言われ続けてきた言葉です。

正直、NPOにするかどうかは迷いました。ただ、2004年当時、すでに雑誌「アエラ」にNPO法人はこれからどうなるかという記事が出ていたんです。株式会社は当時1円から起業できることで信用性が落ちた時期だった。まだ有限会社という法人格をつくるのが残っていた時期で、だったら300万円積んで本気度を見せたいと思った。でもそこは今まで一度も評価されない（笑）。

見せ方の問題だから、NPOにしたら？と今までもよく言われました。だから、「つくるなら、自由なNPO法人、異業種が集まって、社会学じゃないですけど、越境できるNPO法人だったらつくりたいですね」ということで、この対談は終わりました。

「営利か非営利か」の二極で言われるんで

すけど、これに対してはこんなふうにお答えしています。

グリム童話かアンデルセン童話か忘れましたが、「動物対鳥の戦争」という話があって、コウモリが時には「動物」と言い、時には「鳥」と言う、という話があります。このお話では、筋の通らないイヤなこもり、という内容ですが、私は胸張って「いい意味でのコウモリ」でありたいと思います。それを実践するためには、裏付けのある持論がないといけなと、この5年間やってきて思います。たぶん、いまは、大学院に通っていた頃より勉強しています。常に修行し続けながら、考えながら行動すれば、いい意味でのコウモリに近づけるのではないかと。

起業に関しては「背水の陣を敷いてやれ」という方が多いのですが、マクドナルドの藤田田さんでしたか、「失敗は2回できるようにしておけ。最初に全部突っ込むな。」というお話があります。その人のキャラクターによると思うのです。最初に全財産なげうってやる方が成功する方もいっしょにやれば、やってみて修正をかけながらやられる方。それは個人のキャラクターによって、いいか悪いかは違うと。だから自身のキャラクターをつかんだ上で、自分が本当に成長するやり方はどっちの道なのかを見極めながらやっていくのがいいのかなと思っているので、私はまだ看護師の草鞋を履いています。一看護師として、まだ現場にもかかわっていたいですし。私の話は以上です。

田村 営利か、非営利かが重要なのではなく、「課題が解決するかどうか」が重要だということですね。そこは今日の話で、伝わったのかなという気がしています。ありがとうございました。

ニーズごとに組織分担

続きましてNPO法人み・らいずから山中さんにお話していただきます。

山中 NPO法人み・らいずの山中文と申します。ピンチヒッターで代表の代わりにまいりましたが、あたたかい目で見守っていただければありがたいです。NPO法人み・らいずはどのような組織であるかということをご説明させていただきたいと思います。

NPO法人み・らいずは私たちが大学生の頃に障がい者の方と一緒に外出するボランティアサークルとして、学生の友人と2001年に立ち上げました。もともとNPO法人み・らいずは、障がい者のヘルパー派遣事業のNPOを立ち上げたんですが、2006年に制度化された介護保険法や自立支援法の関係で株式会社に移し、NPO法人の方は自分たちの自主事業として、やりたいことをやっていこうと、二つの団体に分けております。

事業の説明としては、「み・らいず」の社会起業として障がい者支援のイベントがあるんですが、もともと学生時代にやっていた障がいを持っている人と料理教室に行ったり、障がいを持っている人がいろんな経験を積めるというイベント事業などをしていきます。「のーまらいず」は障がいを持った方のアートを社会にカッコいい形で発信していこうという事業をしています。

み・らいずの中で大きな自主事業になっているものですが、発達障がい者・不登校支援事業で、学校には行けないんだけど、違った場所でお兄さん、お姉さんと勉強したり、友人関係で勉強するというサテライトという場所の企画運営をさせていただいています。大阪市に3カ所、学校には行けないけれど、この居場所にきたら話を聞いてくれる兄ち

ちゃん、姉ちゃんがおる、という場所を運営させていただいています。今、いろんなところから取材を受けるのが「ランメイト」というところですが、発達障がいの子どもたちと、不登校の子どもたちに向けてこれは独自の自主事業として家庭教師の派遣をしています。今、大阪の住之江区が本拠地ですが、奈良や寝屋川からも、来てくださいと、かなりたくさんの方の依頼をいただいています。来年4月から一番力を入れようというのが就労支援で、障がいの方、発達障がいの方をメインに焼き鳥屋をしようと考えています。企業と組んで、障がいを持っている方に焼きと申うちをメインの仕事にして、店舗でさばいていこうという事業を進める計画をしています。

高齢者支援の「しょーらいず」は、介護保険はとても枠組みが厳しくて、墓参りに行きたい、同窓会に行きたい、デパートに行きたいということは許されないんです。介護保険で行けるのは近くのスーパーなんです。枠組みが厳しく、高齢になって病気や事故とかで外出できない方は、好きだったカラオケにも行けなくなる。それはあかんやろということで、余暇の支援も高齢者には必要だと派遣事業をさせてもらっています。学生部は住之江区を中心にまちづくりをしています。みらKIDSというのは地域の子どもたちにお祭りやイベントをしようという事業です。

み・らいずの特徴として学生が支援する。ヘルパーに行っているのも学生で、ボランティアに行くのも学生、家庭教師のを派遣しているのも、就労支援を手伝っているジョブ・コーチも学生です。

株式会社と・らいずは介護保険支援で行政からお金をもらえるものは事業としています。その他、株式会社 YEVIS は去年度、NPO 法人ブレーンヒューマニティーと、

NPO と NPO がくっついて面白いことをしようとはじめました。NPO の代表の方たちは、個性がきついというかパワフルな方が多いので、NPO 同士が一緒に何かをやることはあるかもしれないんですが、手を組んでやろうというのは少なくて、一回やってみましょうと。同じように学生の派遣事業、障がいを持った方への派遣事業を行っています。

ヘルパー派遣の概要としては、生活支援や外出支援が学生で、一緒にプールに入ってください、公園で野球してくださいとかいうニーズも多いので、移動支援が大きな部分です。住之江は365日、24時間ということで、重度障がいの方を24時間支える派遣事業をさせていただいています。ヘルパーは主婦の方は1名だけで、それ以外は大学生です。

めっちゃ楽しい活動を

イベント事業の釣り大会です。淡輪ヨットハーバーは釣り禁止区域なんですが、2001年にみ・らいずができた時に飛び込んで「ここで釣り大会をしたい」と話をしにいったら「いいよ」ということで、ここで毎年、釣り大会をしています。釣り禁止区域なので、めっちゃめっちゃ釣れるんです。いれ食い状態です。「釣れたぞ」と満足感があって人気の事業になっています。知的障がいの方と学生がボランティアで釣りをしています。学生の方が楽しんでますけど。

み・らいずのキャンプ、学生の時から障がいを持っている人と旅行にいこうやと。「バリアフリーのところに行くんちゃうのや。皆で車椅子担いで海もいこうや」という感じで、学生が学生のボランティアを呼んでくるんです。「キャンプ面白いねん、一緒に行けへん？」という感じで広報しています。

クリスマス会は小学校の体育館を開放してもらってクリスマス会をします。小学校の体育館を借りられるようになるまで時間がかかり、ずっと「体育館を貸してください」「地域のものじゃないから」ということでいわれたんですが、今は快く、「今年はクリスマス会はないんか？」と教頭先生も快く受け入れてくださっています。雪祭りは雪を見ることがないお子さんがたくさんいらっちゃって、雪を見てみよう、長野県でスキーをしたりしています。

みらキッズのハロウィンは住之江区内の家を歩くという事業です。ミニすみのえは、ダンボール版「キッサニア」みたいなものです。まちづくりをする。まちにどんな店があって、どんなものがあればいいんだろうという会議をして「みら」というお金を働けばもらえて、それで買い物ができるものです。小学校にいくような子どもたちのやる市長選挙は、めっちゃ面白くて、すごく心を打たれる素朴で大事なことが聞けるので、毎年、楽しみにしています。

卒業したら、障害者の入浴どうするの？

み・らいずの歩み。私は福祉学部の学生ではなく、普通の女子大生で、たまたま友だちに「障がいを持っている人と一緒にフリーマーケットすることになってるけんやど、手伝ってくれない？」といわれて、最初びっくりしたんですね。ボランティアをしている学生は周りにいなくて、ボランティアはいい人がするものだというイメージがあったんですが、仲がいい人がやってというので、いらん服があるし、軽いノリでいったんです。

それまで全然障がいを持った方とかかわったことがなくて、作業所に行く時すごく緊

張して「叩かれたらどうしよう」とか「何とかいわれた時、どう答えたらいいんだろう」と思っていたんです。だけど、その時にいたのが、み・らいずの立ち上げメンバーですが、衝撃的だったのは、障がいを持っている人に突っ込んでたんですね。「障がいを持っている人に突っ込むなんて、やさしくない」という思いこみがあったので、「なんや、普通にやっていいんやったらできるわ」ということで続けさせていただいて、キャンプでガイドヘルパーのボランティアをしていた学生と仲間になって、「こんなに面白いことが年に1回しかないのはもったいない」というのでサークルを立ち上げました。

月に3回、イベントをすることになったんですが、作業所で出会ったボランティアだったので、〇〇大学の何とかサークルではなかったんで、自分たちが卒業したら継ぐ人間がいなかった。皆、ばらばらの大学で、作業所で出会った人たちと自分たちでつくったサークルだったので、「私ら卒業したら、この人たちはどうするんやろ、毎週お風呂入れているのに、どうするんやろ、お母ちゃん、70歳を越えて、あんたらがきてくれて助かる、というのを、どうするんやろ」ということで、それなら皆で会社をしようやということになりました。

2000年に私たちは卒業したので、「NPOがあるらしい」と。NPOになりたかったわけではなくて、株式にも有限にもなれないから、NPOしかなかったんですね。どうもタダでできる、福祉は（NPOに）入るらしいと聞いて「NPOでいいんちゃう？」という感じで設立して、1年間くらい就職したり、福祉学部ではなかったんで資格をとりにつたり、バラバラになって、その後、NPO設立のために2001年に戻ってきて、皆で立

ち上げたということです。

極貧時代がきまして、食えない時代がきました。その頃、ヘルパーをやって1410円の時給が出ていたんです。それを1000円はヘルパーに払って410円を自分たちにバックするという仕組みをつくったんですけど、今まで1410円で働いて1000円時給にして410円を事務所に入れていた。時給は減るし、事務所は儲からないという時代がきて、「どうする？」ということで、男性スタッフはパチンコに賭けて、お金がなくなって女性スタッフにお金を借りたりという時代がありました。この時には、介護保険のように障がい者にも制度化されるという話が出ていたので、それまで何とか頑張ろうよということでやっていきました。

2003年、支援費バブルがくるんですけど、今まで1410円の単価でお風呂入れていたのが、いきなり4020円くらいになったんですね。すごいお金じゃないですか。すごいということと、制度を使う人が増えたということで、ニーズがかなりありまして、毎日ヘルパー依頼の電話がじゃんじゃんくるようになりました。

寝る間も惜しんで働くと、お金があれば自分たちでやりたいことができるじゃないか。やりたいことがあるから、お金を稼がないといけないということで、たくさんの利用者の支援に入りまして一生懸命働いたんですが、その時に、学生時代からかわってきた利用者さんのお母さんが脳梗塞で倒れたんです。利用者さんをずっと支えたいと思ってたんですが、ヘルパーだけでは何時間しかヘルパーを使ったらだめですという決まりがある、お母さんがいないと、彼女は一人きりになる時間ができてしまう。彼女を施設に送らなければいけない状況になりました。そこで私た

ちがやったことは何か。私たちは彼女たちの生活を支えるということに失敗して、このままヘルパー派遣だけをしていたらだめだよ、ということで、新たな取り組みとして、たくさんの事業が増えてきました。事業が増えれば増えるほど、何か動いたら違うニーズが見つかるんですね。他の困った人に出会えます。それに挑戦していこうということになっています。

自分も幸せに

学生時代、ガイドヘルパーで障がいを持った方とグアムにいった時のことです。英会話の練習をして飛行機も初めてだったので、パスポートをとりに行った時も「ここはグアムか?」「ちがう、ここは準備段階や」と。初めて海外にいかせていただきました。

これが代表です。NPOアワードで賞をいただいた、立ち上げの時のメンバーの写真です。いろんな仕事もきまして、講演依頼もきまして、100人規模の講演をお受けした後、酔っぱらった時の写真です。

の一まらいずの事業の中で、障がいを持たれた方のアートはいいと思っていて、バザー的に売るのではなく、カッコいい形に出したいということで、好きなビームスというセレクトショップに提案させてもらって、その方が描いた絵が1枚5000円のTシャツになって売り出されました。障がいを持っておられるけど、彼は誰にでもできない、やりたくてもできないビームスのデザイナーなんですね。

み・らいずをやる中で夢だったのは、社員旅行をしたい。皆で労りたいと、2年前、ようやく社員旅行にこぎつけまして行ってきました。ほかに、学生が支援者なので3月の初旬にホテルできちんと卒業パーティを

します。4年間一生懸命働いてくれた学生たちを送り出す。ヘルパーに行く時はジーパンにリュックなんですけど、こういう時くらい正装してお洒落していこうよという日を設けています。

み・らいずのミッション。み・らいずはみ・らいずにかかわるすべての人を障がい者を支援しますということで、利用者さん、障がいをもたれた方、高齢の方を幸せにするためには自分も幸せでないといけない、スタッフも幸せでないといけないと思うので、支援者と支援される側ということではなく、皆が幸せになれることを目指してみ・らいずは頑張っています。

田村 ありがとうございます。み・らいずの活動、YEVISの活動とか、社会の課題解決の新たな担い手という資料の表紙に出てくる能島君が西宮でやっているブレーンヒューマニティーという団体と、み・らいずと一緒につくった会社がYEVISで、ヘルパー派遣ですね。

edgeをやっていてよかったなと思うのは、若い社会起業家のコミュニティをつくろうというのが当初の意図でして、その中で一緒に事業をやろうか、ということが出てくるのが楽しいことです。ミニすみのえも松浦君がやっているのは、子どもの社会性を高める、仕事体験をするプログラムなんだけど、そこにみ・らいずが加わることで障がい者というテーマがついたり、他の社会起業家と一緒に何かをすることで化学反応を起こす。NPOはそれぞれのテーマの中ではつきあいが深いんですけど、分野を越えて横につながるのは、あまりないものですから、edgeがそういう機会になっているのかなと、とてもうれしいなと思っています。

制度の枠を越える

お二人の報告が終わったところで、いろいろ議論したいことはあるんですか、特に人材というところに絞って、話を深めていきたいと思います。谷口さんと山中さんに伺いたいのは、社会の課題を事業的な手法で解決していくことが一つかなと思いますが、そういう分野で今、求めている人材、大きく分けて起業型の人材と、立ち上がった事業を管理するマネジメント型の人材、両方が必要だと思いますが、どんな資質、スキル、心構え、経歴をもった人なのか、また、今、どんな人材が足りないのか、現場では人材の面で何が課題なのか。人にまつわるところでの現状、課題、これからについて話をまとめていただきたいと思います。

その次にそういう人材をどうやって育てていくか。では、社会起業、地域公共人材として、どういう人が必要なのかをお話いただきたいと思います。

山中 そういうことを勉強したわけではありませんので、現場からの必要ということでいいですと、田村さんの話にもありましたが、ウィン・ウインの関係を築ける人材が必要ではないかと強く思っています。私たち、福祉分野が主なので行政とのタイアップも多いんですが、いつも支援の中で思うことは、しんどいことをしんどいと伝えることではなく、そこに事業性も大切だと思いますが、ワクワクを伝染させる人とか、これをやったらこんなに変わるんだということを人に伝染させることができる人が必要で、そうじゃないとウィン・ウインの関係にならないと、日々思っています。「苦しいことがあっても、笑って伝えよ」とスタッフに言っていますが、このようなウィン・ウインの関係を

築ける人が必要ではないかと思います。

谷口 私が知り合う方は、看護師とか、資格を持った方が多いんですが、資格はあってしるべきですが、それプラス α 、無理だなと思えることを、どうやったらクリアできるかという発想ができる人。意外に少ないかなと思います。無理だということでも、無理なことをどうやったら突破できる可能性があるか、という思考ができる人が本当にほしいけれども、少ないな、という感じです。

田村 私自身の活動の対象は外国人住民向けのサービスだったんで、制度がないんです。資格もなければ制度もない。そもそも役所からお金をもらって、という枠組みがないので、最初からつくるしかなかったんですね。自分たちでやっていくしかないというのが、ずいぶん長かったんですが、そこは今となってはプラスだったのかな。制度があるという前提でものごとを考えてスタートしていると、新しいものをつくるという発想に立てなかったかもしれないと思います。

また、阪神・淡路大震災という切り口、ズバツと共通の、「阪神・淡路大震災」という切り口でいったので、そこで高齢者、まちづくり、環境、外国人、いろんなことをやっている人が、震災という切り口で一緒になれたので、それは横につながっている部分がありました。日常では、なかなかそれができないんです。職種を越えて横につながるということは、よほどのきっかけがないと難しいんですね。例えば看護師さんという枠の中だけで考えることに陥ってしまう。枠を越えてつながるといえることができれば、新しい解決策が出てくるだろうと思います。今、お二人も同じような方向性を出されたのは、そこだったと思います。枠を越える、ということですね。制度の外にあるサービス、制度以上のサ

ービスが必要だったり、というところに向き合って提供してきたということが共通なのかなと思います。

人材育成できる人材を

では、そういう人を、どうやって地域全体で育てていけばいいのか。大学の役割にも触れていただければ、主催者的にもうれしかなど思ったりするわけですけど。み・らいずは学生が多いですね。

山中 ありがたいことに、卒業した大学の先生との個人的なつながりもあって応援していただいています。スタッフが卒業した大谷大学はフィールドワークの中にみ・らいずを入れていただいています。そこからきた学生が支援者になっていくパターンもかなり増えてきているなと思います。

広報としては学生の支援者がほしいので、いろんな大学に呼んでいただいてみ・らいずの説明をして、そこで働きたいとか、ボランティアをしたいという学生を集めるということで、そこで集まった学生が資格をとれるように、資格講座もやっているの、そういうチャンスを与えてくださる大学はいつでも大歓迎という感じです。6月に京都で派遣事業所を立ち上げることになっていまして、三条あたりで考えています。京都は大学のまちなので、支援のあり方とマッチングするのではないかとということで、ぜひ龍谷大学さんにもよろしくをお願いします。

田村 ちょっと具体的すぎて（笑）。

山中 地域公共人材についてですが、人材育成できる人材がほしいというか、本当にそうなんです。現場型のNPOできていまして、その中で経営の力をつけないといかんということで、いろんなセミナーにいたり、

edge に行かせていただいたりするんですが、どうやって人材育成をするのか、自分たちで立ち上げてきたので、そういうことを教えていただけていないので、企業の人事関係の人とタッグを組んだり教えていただけたら、もっと成長するのではないかと考えています。

田村 そうですね。大学もですけど、企業とのつながりもあっていいのかなと思います。

谷口 NPO・地方行政研究コースに来ている方は、ほとんどが社会人の方だと伺ったんですね。その方々は元の職場に戻られると思いますが、現役の学生の方が、このコースを選んで、その後起業しないなら、学生は一般企業に就職してほしいな、と思います。

学んだ理念を持ったまま、その企業の中で活躍して、企業と NPO や行政などを結びつけるコーディネートの役割をしてくれるような人材になっていただけたらいいのかなと思います。

NPO コースをとりました、だから福祉や行政や NPO が就職先、ということは、決まなくてもいい。学んだことを持ったまま、あえて一般企業に入る。そういう学生さんが増えたらいいな、と思っています。

個人的には、人材育成できる人材がほしい。現場のノウハウはあるんですけど、人が、どう協力していけばいいかということを教えられる人が、一番足らない部分なので、それができる方は、本当にほしいなと思います。

田村 なるほど。NPO の現場の人材育成は、OJT という名のもで、実際は放ったらかしというのがほとんどですから。人材育成というところが手薄かなと思いますね。団体の代表者が自分の団体のスタッフに「お前、もうちょっと成長しろ」というと、うっとうしく聞こえるんですが、他の団体の人が指導して

くれたりすると、案外聞くんですよ。edge のような枠組みだと団体を越えてできるので、横の人間関係、斜めの人間関係をつくっていく。そういう機能を大阪だと edge であったりするんだけど、京都だったら、大学が団体の枠を越えて人をつなぐ役回りをやってもいいのかなという気がしたりします。

異分野とつながる、地域から認められる

もう一つは、事業をやってこられて、社会起業家としてやっていく中で、いろんなサポートを受けてこられたと思うんです。自分の事業を進めていく中で自分の団体のスタッフだけではなく、いろんな人からの支援があったと思います。そういう外にいて支援してくれる人材が必要だと思うんですが、外から受けた中で有効だった支援や、どんな人からどんなサポートを受けたか。こんなサポートを受けたいが、今はないということなどがあればお話ください。また、人材、社会的企業を育んでいく人材という意味ではどんな人がいれば、どんな機能があれば、もっと成長できる、もっと課題解決ができる。こういう支援があったから、ここまで至っているということでヒントをいただけたらと思います。

山中 外から受けたサポートでは edge が一番のきっかけなんですね。それまでは自分の事業内で回す事業責任者として動いていたんですが、初めて福祉分野ではない外に出て、いろんな人とつながっていくこと、人とつながれば何かが動くんだと感じたのが edge でした。他分野の方と知り合ったことが大きくて、自分自身が高齢者のケースにかかわっていますが、難しいケースは、高齢者の問題だけでは解決しなくて、そこに貧困の

問題、障がいの問題とか住宅の問題とか、多分野にわたって問題が重なっていますので、それをくっつけていくコーディネート力、自分はそういった知識はないので、知識を持っている人に会わせていただく場は、すごく大きいのではないかと感じています。

谷口 いろんな方にご支援いただいたので、これというのは難しいんですけど。去年、ありがたいなと思ったのは地域の任意団体から、講師をしてくださいということで講師をした時に、NPOとか有限会社の垣根は全く考えずに、素直にやっていることがすごいと応援してくださった。

地域の場所に呼ばれて地域の人に認めてもらえる、応援してくれる、その言葉自身が励みになるというか、ありがたいと思います。edgeさんにはお世話になれないんです、NPOではないから（笑）。きょうと元気な地域づくり応援ファンドは「NPOも営利企業も受け付けていますから」ということで、そこにはお世話になりました。

田村 別にedgeは有限会社でもいいんです。若者といっても、71歳の方がこられるんですから構わないんです。有限会社だから、だめという壁をつくってしまうのももったいないなという気がしますよね。枠組み自体で壁が結構あるので、それを取っ払って、垣根を乗り越えて関心を持ってサポートしてもらえればと思います。

せっかくの機会ですから、私からの情報提供とお二人の事例発表、そしてディスカッションを聴いて、ここに出席されている皆さんはどうお感じになったか。せっかくの機会だから、3人に質問しておこうぜ、とか、隣近所の方と5分ほどお話いただいて、その後、質問の時間にしたいと思います。

〔質問〕

挫けている暇はない

質問 京都NPOセンターです。谷口さんと山中さんに。現場で挫けそうになった時、何を支えにされますか。あとは谷口さんは京丹後の出身ですね。山中さんは？

山中 大阪の堺市の出身です。

質問 都市部での支援体制はできていますが、谷口さんの故郷である京丹後とか過疎地とか中山間地域で、こういうビジネスモデルをこれからどうやって起こしていくのか、アイデアを聞かせていただければと思います。

田村 まずは、挫けそうになったとき、何が支えになったか。

谷口 2つあります。真面目な理由は、友人が末期ガンで死んだのが35歳で、私は今、42歳です。彼女と私は、生年月日が同じです。入った学校も一緒、就職先でも同期です。すべて一緒。誕生日占いで血液型占いで一緒に運命だったにもかかわらず、私が生きている意味がよくわからない。何か意味があるんだろうなと。私ではなく彼女が死んだというのは何かあるんだろうなというのがモチベーションになっているので、本当に落ち込んだ時、そこを思い出すと復活できる。

ユニークな理由の方をいうと、私、将棋にはまっていまして、棺桶に入るまでに3段をとるというのが目標なんです。まだ「級」だから、まだまだふんばらないといけない、将棋を続けるには仕事もふんばらないといけない、と（笑）。

こんな2つのことを挫けそうになったときのモチベーションアップに利用しています。

あと京丹後のことですが、非常に難しい問

題です。田舎にいと「そんなんは、近所の人がやってくれる」という幻想があるんですね。「親が助けてくれる」と。でももめるケースも増えています。

ストレスがかかっていない状態では、親と何とかコミュニケーションがとれているんです。ところが自分が危機に陥った時、ホルモバランスが崩れて、そういう状態になった時、親とのかかわり方で、もめることが非常に多い。

このあたりは啓蒙活動から踏まえていかないと、おそらく難しいと思います。家族であればあるほど、神話がまだ残っている田舎のほうが、都市部よりも難しいのかなという思いはあります。

山中 日々挫けそうになっているんですけど、学生時代からの友人たちと立ち上げたことが大きくて、喧嘩できるほどのスタッフだというのが大きいのではないかと思います。本気で仕事上の喧嘩ができる場所です。それと、娘が5歳で、本当に辛い時は娘に相談しています。シンプルな答えが返ってきて「そういう時は優しくしてあげた方がいいと思うよ」「わかっているけど、できへんねん」「そうよね」みたいな。納得させられたり。娘に助けてもらっているような感じですね。答えになっていませんけど。

都市部で活動させていただいているので、過疎地での支援にかかわったことはないんですが、NPO法人ふわりという、知多半島でネットワークを組んで障がい者福祉をやっているところは、「自分のところはこれをやるから、あんたのところはこれをやり」という役割分担と、どうしても皆でやらないといけないところ、成年後見とかは広範囲のネットワークをつくって名古屋の方でされているケースを聞いています。

田村 挫けている暇がないというか、挫けている場合じゃないということですかね。

僕は逆に、都市部よりも地方の方がアプローチしやすい部分もあるかなと思います。都市でやっているのをそのまま地方に持っていくのは難しいんですけど、地方は地方なりのアプローチの仕方があると思うんですね。よくも悪くも顔が見えて、誰か何をやっているかわかりますので。知多半島はわかりやすく、どこの農家のビニールハウスが空いたと、皆知っているわけです。すると「ビニールハウスでシイタケ栽培できへんか？」とすぐ持っていくとか。そういうのはむしろ地方の方がフットワークが軽い。「みんな知っている」ということは息苦しいと感じることもありますけど、そこを逆手にとってやってしまうということは、地方だからそこでもできる部分もあるのかなと。都市の同じものをそのまま持っていくのは無理だと思います。地方なりのアプローチの仕方はたくさんあって、地方の方が豊かに元気にやっているなど、最近、思います。

行政と地域住民とのつながり

質問 山中さんに質問です。住之江区に長く働くものとしてお聞きしたいんですが、住之江区は広い地域で、昔ながらの土地と新しい土地が混在しているところですが、昔の地域でやっておられるのでしょうか。昔の地域ですと人のつながりがあると思いますが、埋め立て地の方は、独居老人とか広がっています。

山中 南加賀屋という昔からの地域に近いところが本拠地になっていますので、どここの自治会長さんが「ここを助けてやってくれ」とか、〇〇園の園長さんとか、昔の方と

のお付き合いと商店街のお付き合いが深くなっています。新しい埋め立て地の独居老人問題は孤独死の問題など住之江区で問題になっています。独居老人の住む昔の新興住宅地へのアプローチには欠けている状態で、学生が勝手に民生委員みたいなをつくって、学生が独居老人の話し相手になる学生民生委員をつくろうかと考えている最中です。

田村 団地の問題はこれから大事で、1 団地 1 大学くらい連携して、見てもらう必要があると思います。いくつか事例も追っ掛かたんですけど、団地の方も身構えちゃうんですね。調査対象にされるのではないかな。うちの団地は「限界団地」と言われるんとちゃうかとか、アプローチすると恐怖感を覚える住民の方もいらっしゃるって難しいんです。

けれども、これからの日本にとって、いわゆるニュータウンをどう支えるかは、大学としても積極的ににかかわっていいテーマではないかと思っています。

質問 市役所で税金の徴収を担当しています。NPO・地方行政研究コースで勉強したことが生かされていないような気がしているんですが、外国人の就労の問題がたくさんあって、担当部署に話をして「何とかせえや」「お前らが何とかせえや」となる。僕のところにも「どうしたらいいだろう、若いから、わかるやろ」とくる。

地域の問題を地域でできるだけ解決したいけど、知らん人は入ってほしくない。一方で、地域ならではのプライドがあって、近所に大学があるんですが、それは気に入らんと。でも何とかせよと。推進協議会はたくさんあるけれど、高齢者がやっている。誰が教えるんや。どうしたらいいという話が堂々めぐりできていて、僕が関西学院大学のボランティアの学生たちとをつなげてやっている

んです。行政もわからないんです。問題があって、こういうのをやっていると知っていても、社会起業家がやっているのは知っているんですが、案外、行政がわからない、つながらない。行政の中をつなげていかないといけない。地域の人の気持ちを何とかしたい。そのあたりをどうしていったらいいかなと、ぜひ教えていただきたいんです。

田村 一つは行政、もう一つは地域の人たちとのつながりですね。み・らいずは住之江区役所とわりと仲良くやっていますね。課題があれば、他の地域でもこういうのをやればとか、どうでしょうか。

山中 堺の話になりますが、堺に新しく事業所を立ち上げる時に、市役所に近いということで、直接お話できることがすごく多かったんです。行政がネットワークの会議に必ず顔を出してくれるんですね。何とか協議会とかあると思いますが、なかなか動かなかつたり、いらいらすることがあると思いますが、通い続けることしかないのかなと思います。住之江区も最初は相手にされない状態でしたが、通い続けて一緒に何かをやっていくことで関係性ができていくということでした。

田村 自前で民生委員というのは、既存の民生委員や自治会長ではダメなのでしょうか？

山中 難ケースと呼ばれているんですが、難ケースが私の担当になるんです。でも私が難ケースをやっていると思うのは、自分一人ではできないので、必ず誰かの力が必要になるので、自分から「助けてください」といって行かざるをえないんですね。そうなったら民生委員さんに必ずつながる。民生委員さんも難ケースのことは知っているんです。地域で有名な困ったケースを知っているのだから「私も困っていたんよ」ということで、必ず手

を組んでくださるんです。難ケースと一緒にするというのはいいかもしれないですね。

田村 谷口さんは行政とのつながり方、地域とのつながりはいかがですか。

谷口 地域だと、議員さん経由というのがありますね。議員さんは、地域の協議会などに顔を出されていたりするので、議員さんのテーマが妊娠、出産だったりすると、私と一回会いたいとなって、その結果、協議会に呼ばれていくというつながりはありますね。

田村 いずれも具体的なケースがあって、つながりができるということですね。

分野をこえてつなぐ

最後に、人材のところで一言ずつ話いただいて、今後、大学でどんな人材を育ててほしいか。それが社会の課題解決に、どういう方向性や可能性があるか、少し言及していただきつつ、締め言葉をいただけたらと思います。

谷口 私は社会人で大学に1回生から入って、そのまま大学院に進んだのですが、自分の現場を見て、それを裏付ける理論がほしくて学んだのです。思うことは、そういう人材がもっともっと出てきてほしいと思うし、大学側は、学生が卒業した後、具体的にどういう活動をしているかを把握して、その方々を大学の先輩として活かせる場を提供することも含めてやっていったらいいのかなと思います。定期的にやっていくことで、リアルなモデル像を現役の学生に見せることができるのではないかと。これをぜひ継続して、単なるムーブメントとしてやってみました、ではなく、継続していく方向でやっていくのがいいのかなと思います。

山中 み・らいずに来る学生は、就職活動の

時に、ボランティア活動とか何かPRする部分がないといけないので、何か学生時代にやっておかないといけないという思いから来る学生も多いです。きっかけは何でも構わないと思います。一見無駄と思えることもけっして無駄じゃない。学生時代にいろいろなことができるのに、学生たちは就職するために必要なことをしなければいけないということで切羽詰まっている感があります。大学だけの問題ではないと思いますが、無駄なことがつながるということも、大学の中でもっと学んでいければと思います。うちの代表は、近畿大学の商学部を出ているんですが、全然関係ないところからNPOに来た人がいたりするので、無駄なことではなく、就職のためだけではなく、何か学生にもしてもらえたらいいなと日々感じます。

田村 ありがとうございます。求められている人材像は、かなり具体的になってきているのではないかと思います。それは現場でマネジメント力があること。人材を育成する人材が必要だということ。分野を越えて横のコーディネートができる人材が必要だということ。できればそういう人たちがいろんなところで働いて、行政だったり、NPO だったり、企業だったり、いろんなところにいるんだけど、分野を越えてつながれるような人材の創出の仕方が必要であるということが今日、一つ明らかになったと思います。

形式化と非形式のバランス

そして、関係性の構築は、ある程度形にしておく。関係はある程度、形式が必要な部分もあろうかと思います。その中で外からのかわりが形になって具体化することがあるのかと思います。

じつは私は、龍谷大学ボランティア・NPO活動センターを参考にして、甲南女子大学のボランティアセンターを立ち上げてかかわっています。学生数4000名ですが、そのうち400名がボランティア登録をしています。かなり地域に出掛けています。評判はすごくいいですね。それだけではなく、偏差値が上がっています。龍谷大学をモデルにしたんですが、外から見た時に、形になっていることは大事だと思います。今回、ここに来させてもらったのも、NPO・地方行政研究コースとして、NPOや自治体と互惠的連携という形で形式が整えられているから来られるということもあります。

一方、何でも形式にするのはどうか、とも思います。資格を出すのも大事なんですが、カリキュラムにないものの方が実は大事だということもあるのではないのでしょうか。多文化共生という違う文化を持つ人たちが一緒に暮らす異文化カリキュラムの中では、アメリカの学校では誰が先生なのか、教材の中にどんな人が出てくるかが大事です。よく見ると、セサミストリートでは黒人の人とか、障がいのある人とかいろんな人が出てくる。実はそれが大事で、カリキュラムの中で、どんなものをプログラムにするかという時、どんな人が教えているのか、学校の中に何があるのかなど、カリキュラム以外の部分が大事ではないかという話があります。幼稚園でも、教室にあるおもちゃの人形はいろんな色の人形があるのか、白人の人形だけがあるのかということで自分の形成が違ってくるように、大学においてもカリキュラムにしている部分は大事だと思いますが、カリキュラム以外の部分で、どんな人が大学で教えているのか、どんな人と出会えるような場があるか。カリキュラム以外の形式以外の部分も大

事ではないのでしょうか。

み・らいずがやっていることは大学を越えて人が集まって楽しい。それを大学のプログラムにした途端に陳腐なものになると思うんです。「授業だから釣りにいきました」となったら、たちまち、しょうもないものになりますよね。形式化する部分と形式以外の部分で大事なところがある。両方合わさってはじめて、本当に地域に必要な人材を生み出せることになるのではないかと、今日のお二人の話を聞いていても思います。

既存の資格にあわせていくと面白くない人材しか育ちません。谷口さんという看護師さんがいるから面白いのであって、看護師の資格だけでは面白くない。リアルなモデルを見せていくような、形式的なものの以外に備わっているものがあると、求められる人材が育てられるのではないかという気がしました。

お二人のゲストに面白いお話をしていただきました。お二人のゲストに拍手で感謝の気持ちを贈りたいと思います。

司会 田村さん、谷口さん、山中さん、長時間にわたり、ありがとうございました。これをもちましてシンポジウムを終了させていただきます。長時間にわたりご静聴いただきありがとうございました。終了するにあたり、この企画を進めてきた法学研究科の村井浩さんよりご挨拶をいただきたいと思います。

村井 皆さん、長時間のシンポジウムにお付き合いいただきましてありがとうございました。「起業で社会、地域をつなぐ」ということで進めてきたんですが、この企画で、NPO・地方行政研究コース1期生の田村さんと呼びこもう、社会的企業のあり方について一緒に考えてみたいと思い進めてきました。内容については田村さんの方でおまとめ

いただきましたので十分だと思います。谷口さん、山中さん、ありがとうございました。もう一度拍手をお願いいたします。

私は 46 歳で、京都ユースハウス協会です。仕事をしておりますが、改めて、大学院で 1 年間学んだことはすごく大きくて、このつながりをもって、今回は 3 人の方に来ていただき、卒業シンポジウムをすることで、また新たなつながりを持てたことをうれしく思います。たくさんの方が来られていますが、この機会に、今日、帰るまでに名刺を配っていただい

て、この場に来て共有したことを、さらに広げていく機会にしていただきたいと思います。一つのきっかけとして、これから継続するような関係づくりをしていただけたらと思います。それでは皆様、どうもありがとうございました。

司会 それでは、これで 2010 年度の院生自主シンポジウムを終わらせていただきます。ありがとうございました

[2011 年 2 月 12 日]